

沖縄語文の中の漢字への振り仮名と送り仮名の例(2枚)

2007年4月11日

沖縄語研究家 船津好明

以下は、筆者が沖縄語の普及活動中に遭遇した課題の解決案です。学習者に向けた書き方のあり方に関するものです。以下では、公刊書面の漢字には必ず振り仮名を振るものとし、ただし、学問、研究、文学のための書き方は、また別です。

例えば、沖縄語文の中の「かんげーゆん」を取り上げてみます。「ー」を「え」に変えて「かんげえゆん」としても、同じ論理です。これに漢字「考」を入れて、必ず仮名を振ります。仮名の振り方と送り方は幾つもあり、

「^か考^んげーゆん」、 「^{かん}考^げーゆん」、 「^{かんげ}考ーゆん」、 「^{かんげー}考ゆん」

などと書けます。振り仮名は、漢字を取り去ったときに送り仮名につながって、音が正しく表されることが必要で、この点ではどれも当たっています。沖縄語としてどれが適切な書き方であるかは、まだ決まっていませんから、書き手に意図があれば意図の通りに書けばよいと思います。

問題は、書き手に確たる意図もなく、書き方に迷っている場合です。書き手が書き手の都合で思い思いに書くのでは、読み手が混乱し迷惑します。そのため、書き方の指針、掘りどころが必要です。

沖縄語の学習者にこの書き方を教える場合を考えてみます。学習者は既に共通語として「かんがえる」を、漢字を用いて「考える」と書くよう教わり、そう書く習慣になっています。沖縄語の「かんげーゆん」と共通語の「かんがえる」は音韻対応が鮮明ですから、上の書き方の例を並べて対応づけてみます。

沖縄語	^か 考 ^ん げーゆん、	^{かん} 考 ^げ ーゆん、	^{かんげ} 考ーゆん、	^{かんげー} 考ゆん
沖縄語	^か 考 ^ん げえゆん、	^{かん} 考 ^げ えゆん、	^{かんげ} 考えゆん、	^{かんげえ} 考ゆん
共通語	(1) ^か 考 ^ん がえる、	(2) ^{かん} 考 ^が える、	(3) ^{かんが} 考 ^え る、	(4) ^{かんがえ} 考 ^る

このように対応は非常に解り易いのですが、我々の現在の事情は、共通語では書き方が決まっていて、(3)が正しく、(1)、(2)、(4)は誤りとされているのに対して、沖縄語では決まっていないということです。現に筆者は沖縄語での、^{かんげ}考ーゆん、^{かんげえ}考ゆんの使用例を確認しています。

それでは、沖縄語としてはどれが一番適切でしょうか。

沖縄語の学習者のための書き方は、学習負担を少なく、学力の向上につながるよう配慮すべきであると考えます。別の言い方をすれば、既存の共通語の知識が沖縄語の理解を助け、沖縄語の理解が共通語の知識を一層深め、言語素養の相乗的な高まりを期待できる、そのような書き方が望ましいと思います。そこで、詳しく吟味してみます。

の「^{かん}考^げーゆん」「^{かん}考^げえゆん」では、学習者は「考」の字を沖縄語では「かん」

と読み、共通語では「かんが」と読むという、不釣合いの二つの読み方を覚えなければなりません。分別感に乏しい子供が国語の時間に二つの言葉を混同して「考がえる」と書けば、学力が低いと評価されます。それでも共通語は「考える」で、沖縄語は「考げえゆん」で、と強いて教えれば、子供はそのように覚えるでしょう。その場合子供には、それなりの学習負担がかかることとなります。

の「^{かんげー}考^{ゆん}」「^{かんげえ}考^{ゆん}」も同じ理由で、正しい共通語の書き方とは不釣合いで、こう教えると不釣合いの分まで覚えなければなりません。教え方の上手な教師なら、生徒は教師の教える通りに覚えますが、上のような懸念を残します。

しかし、共通語との関係が整っている方が、教わる側も楽で納得も早いのではないのでしょうか。の「^{かんげー}考^{ゆん}」「^{かんげ}考^えゆん」なら、(3)の「^{かんが}考^える」と音の釣合いもよく、覚える楽しさも湧くと思います。

よって筆者は、学習者に対する公刊書面では、漢字に必ず振り仮名を振ることとして、

「^{かんげー}考^{ゆん}」(^{かんげ}考^えゆん) を適切とし、 「^{かん}考^げーゆん」 「^{かんげー}考^{ゆん}」などは適切でないと思います。

結果として共通語を基に判断しましたが、このことは沖縄語が共通語に従属するという意味ではありません。共通語を既存知識として有効に活用して、沖縄語の学習を楽しもうというものです。沖縄語として別個の表現体系を作るのは理屈の上ではよいし、学術・研究用には既にそうなっていますが、一般には普及していません。学習者向けの書法ではないからです。

学習負担がより少なく、沖縄語と共通語の間に知識の相互補完をもたらすような書き方であれば、学力の向上につながる筈です。そういう書き方でありたいものです。

上の例は単なる一例ではなく、他の漢字への振り仮名と送り仮名の作法をも示唆するものです。

(以上)